



P4-00B: ASTRO-Hプロジェクトの教育広報活動

馬場 彩 (青山学院大)、秋元文江(名古屋大)、伊藤真之(神戸大)、宇野伸一郎(日本福祉大)、衣笠健三(ぐんま天文台)、湯浅孝行、高橋忠幸、Chris Baluta (ISAS/JAXA)、Chris Done(Durham U.)、Greg Madejski(SLAC)、Barbara Mattson、Koji Mukai、James Lochner (NASA/GSFC)、他ASTRO-Hチーム

1. ASTRO-Hの教育広報(Education and Public Outreach; E/PO)とは?

ASTRO-Hを通じて宇宙科学・科学技術の素晴らしさを伝える。

- ・子供の科学離れや理工学系大学/大学院への進学の減少が指摘されるなど、科学技術の次世代への継承は危機的状況にある。
- ・宇宙研の衛星は国家予算(税金)で作られているため、一般の方はその成果などを享受する権利がある。E/POはその解の一つであり、我々は責任をもって教育広報を行ない、次世代の育成を行なわねばならない。
- ・ASTRO-Hは多くの大学と協力して開発されており、大学学生への窓口も広い。開発を通じてチームの大学に広く最先端科学の魅力を伝える努力をする。
- ・活動は、一般向けの広報、初等教育、高等教育それぞれに合わせた教材を準備する。
- ・打ち上げてからの成果だけではなく、世界最先端の検出器を、日本最高の頭脳が集まって、難題を解決しながら、作りあげていく、この醍醐味を次の世代に伝えたい。
- ・広報・教育の専門機関を持つNASAと協力し、単発的ではなく組織的な広報・教育活動を目指す。

高等教育
(大学、専門高等学校など)

中等教育
(中学校・高校)

初等教育
(幼稚園、小学校)

一般広報
(一般の方)

広報・教育概念図

2. 2011年の教育広報活動(1) 一般向けの講演

- ・教育広報チームでは、ASTRO-Hチームメンバーが行なった教育広報活動をまとめ、webで紹介している。2011年はのべ1600人以上の参加者があった。
- ・また、教育広報活動がよりスムーズに行なえるよう、パンフレットやグッズなどを製作し、希望者に配布している。



対象	講演会などのべ参加者(講演回数)
中等教育	約 860 (5)
初等教育	約 240 (2)
一般向け	約 510 (5)

3. 2011年の教育広報活動(2) 天文学会展示ブース

- ・衛星をより有効に利用するためには、チーム外の研究者にも広く衛星を知ってもらい、活用してもらうことが必要である(含高等教育)。
- ・2011年に鹿児島大学で開かれた日本天文学会ではASTRO-Hの展示ブースを開き、他波長観測や理論を専門とする研究者に宣伝を行なった。
- ・約70名の研究者が参加し、性能やシミュレーション、ヘルプデスクなどに関する質問を受けた。



4. 2011年の教育広報活動(3) ASTRO-H日誌の開設

- ・ASTRO-Hを一般の方により身近に知ってもらい、共感を得るためには、その素晴らしさや成果だけではなく、開発の苦労や乗り越える喜びも伝えることが重要である。
- ・そこで、新たにweb上に「ASTRO-H日誌」を開設し、開発の様子などを伝える活動を開始した。
- ・日本語版だけでなく、英語版もnative speakerによる訳を載せることで、世界の方に読んでもらえるよう工夫している。

